2022/4

2021 年度　自己点検・自己評価

学校法人文化学園　文化外国語専門学校

校長　古屋和雄

[評価]　5：達成している　4：ほぼ達成している　3：どちらともいえない　2：取り組みを検討中　1：改善が必要

1　教育理念・目標等		**評価**
1	1-1　教育理念は定められているか	5
2	1-2　教育目標は定められているか	5
3	1-3　学校の特色は何か	5
4	1-4　教育理念・目標に基づく教育が行われているか	5

≪現状・具体的な取り組み／課題≫

＜教育理念＞

国境を超えて理解し合うためのコミュニケーション力を、日本語を通じて養う。

＜教育目標＞

〔日本語科〕

［本年度の課題］

引き続き対面授業とオンライン授業を併用しながらの授業運営となる。学生の日本語コミュニケーションの機会を増やし、ともに学んでいく環境づくりを心がける。対面授業、オンライン授業それぞれの特徴を生かした指導を心がけたい。

［取組の結果と点検・評価］

オンライン、対面併用の授業運営の二年目となり、昨年度よりもそれぞれの利点や欠点を教員が把握し、効果的な運営が可能となった。オンライン授業用の「予習動画」の作成に学科全体で取り組むなど、教材の開発なども積極的に行った。「予習動画」の使用により、オンラインでもよりコミュニケーションに焦点をあてた授業が可能となった。

［次年度への課題］

オンライン授業や CEFR の普及により、日本語教育のあり方が変化を迎えている。本科の教育理念を大切にしつつ、各レベルでの教育目標を再確認し、新しい考え方も積極的に取り入れていく。

〔日本語教師養成科〕

［本年度の課題］

社会の状況を見ながら、オンライン授業実習をどのような形にしていくかを引き続き考えていく必要がある。また、対面授業における教育能力、指導能力の向上を目指すためにも十分な時間と機会を確保する。オンライン、対面双方の授業の経験を積むことで、これからの日本語教育に適応できる能力を養う。

［取組の結果と点検・評価］

昨年度の経験から、オンライン授業用の教材や教員のスキル、オンライン授業実習対策などはより効果的に実施することができた。しかし、対面授業における教育能力、指導力の機会を十分に与えられ

たとは言えない。
［次年度への課題］
引き続き社会の状況を考慮しつつにはなるが、対面授業の時間を増やし、対面授業とオンライン授業の双方のバランスを考えながら、これからの日本語教育に適応できる能力を養う。また、対面授業における教育能力、指導能力の向上を目指すための機会、授業を提供する必要がある。

〔日本語通訳ビジネス科〕
［本年度の課題］
本年度もコロナ禍の影響はある程度続くものと予想されるため、今年度の実績を踏まえ、オンライン授業や対面授業とオンライン授業の組み合わせ形式の授業において、より細かい対応を行う必要がある。また母国を離れて留学している学生の特殊な生活環境に鑑み、学習面のみならず生活面や心身面においても必要と思われるサポートを行っていく必要がある。
［取組の結果と点検・評価］
コロナ禍への対応も二年目となり、オンライン授業と対面授業を組み合わせながら、より高度な日本語運用能力の涵養、ビジネス現場を念頭に置いた諸スキルの習得、通訳翻訳技術の向上などに関するカリキュラムの一層の充実を図った。そのほか特別授業や課外活動、さらには個別の対応などを通じて、学習面・生活面・心身面に対するさまざまなサポートと対応を行った。
［次年度への課題］
アフターコロナを見据え、ビジネス環境の変化などにも注意を払いながら、よりきめの細かい指導を実現するべくカリキュラムの検討を行う。また特にコロナ禍における異国での長期間にわたる学生生活でメンタル面に不安を持つ学生もいることに鑑み、引き続き生活面や心身面でのサポートや支援を充実させる。

＜学校の特色は何か＞
学校法人文化学園の設置する専門学校の日本語教育機関として、文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化服装学院への進学を希望する外国人留学生の日本語教育を実施している。また、文部科学省より国費留学生日本語教育委託校に指定されており、行政からも信頼を受けている。外国人留学生の学生会館も整備され、安心して学生生活を送ることができる。

＜教育理念・目標に基づく教育が行われているか＞
〔日本語科〕
［本年度の課題］
海外在住の学生の来日の状況を見ながらカリキュラムを検討し、卒業までの目標を明確にして指導していくことが課題である。
［取組の結果と点検・評価］
文科省の国費学生に関しては６月の入国が決まり、比較的順調に国内での授業実施に移行し、通常の教育目標、カリキュラムに近い形での教育を行った。私費学生は入国の目処が絶たず、結果的に１年間海外からオンライン授業に参加することになった。国内の学生が対面授業を行う日には海外の学生を集めたクラスを開設するなど海外学生にも配慮した対応を行い、本科の教育目標を達成するよう尽力した。

［次年度への課題］

来年度も４月開講当初から国内に全学生が揃うことは難しいと予測される。入国できない期間に、一人ひとりの学生に明らかな学習目標を提示し、学習へのモチベーションを維持するように指導することが肝要となるだろう。今年度の運営を参考にしつつ、来日状況に合わせて柔軟に対応する。

〔日本語教師養成科〕

［本年度の課題］

引き続き、日本人と外国人がともに学ぶコースとしての在り方を探っていく。また、外国人学生同士もお互いの文化や言語、その他の背景を尊重しつつ、ともに同じ目標に向かって努力できるような雰囲気づくり、環境づくりに努力する。また、外国人学生に対しては「日本語を正しく理解し、使える能力を養う」ことを教育目標の一つにしているが、日本語科目である「日本語演習」の目標を検討し直し、カリキュラム・教材を整備する。

［取組の結果と点検・評価］

学生たちはお互いの個性や文化を尊重しながら目標に向かって努力し続けた。課題であった外国人留学生に対する「日本語演習」の一部科目の目標、教材、評価を見直した。一貫した通年目標を意識し、ある程度改善することはできたと思われるが、引き続き見直しをしていく必要がある。

［次年度への課題］

本年度改訂した教材、評価を見直し、さらに改善していく必要がある。また、近年は多様な学習者がいるという認識が高まっているが、本科においても引き続き学生同士がお互いの文化や言語、その他の背景を尊重しつつ、ともに同じ目標に向かって努力できるような雰囲気づくり、環境づくりに努力していく。

〔日本語通訳ビジネス科〕

［本年度の課題］

本年度もコロナ禍という特殊な状況に合わせた、これまでにない形の教育形態を模索する時期が続くと思われた。本来の教育理念に沿った実践が行えるよう、常勤・非常勤の講師と学校の教務間の連携を深め、より効果的な教育方法を模索したい。そうした教育形態を可能ならしめる設備の充実（通信環境・設備など）も求めていきたい。

［取組の結果と点検・評価］

コロナ禍における感染状況や社会全体の状況なども見極めつつ、遠隔授業と対面授業を組み合わせたカリキュラムを組み、教育理念や目標に沿った実践が行われるよう尽力した。LMS（Learning Management System）を最大限活用し、科のカリキュラム運営に滞りがないよう細心の注意を払って授業を行った。

［次年度への課題］

アフターコロナの展望がいまだ見通せない状態のなか、引き続き非常時におけるカリキュラムの効率的な運営、教職員間の連携の強化、教育設備のさらなる充実を図っていく。コロナ禍によって今後一定の期間において従来より学生（留学生）数が減ることが予想されているため、そうした状況を見きわめ、学科の運営に大きな影響が出ないよう留意していく。

２　学校運営　　評価

５	2-1	運営方針は定められているか	５
６	2-2	事業計画は定められているか	５
７	2-3	運営組織や意志決定機能は確立され、効率的なものになっているか	４
８	2-4	人事や賃金での処遇・職場環境の改善に関する制度は整備されているか	４
９	2-5	情報システム化等による業務の効率化が図られているか	４
１０	2-6	学校運営を客観的に評価し、維持向上させる機能が整備されているか	５
１１	2-7	危機管理体制は整備されているか	５
１２	2-8	施設・設備は教育上の必要性及び学生の安全確保に十分対応できるよう学校教育法に基づき整備されているか	５

≪現状・具体的な取り組み／課題≫

［本年度の課題］

・本年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を徹底したうえで、安全に教育活動を行う。

・関連省庁の指導にしたがって適切に新規入国者を受け入れる。

・日本語科については、4 月のコース開始時にほとんどの留学生が入国できていないと思われるが、そのような学生についてもオンライン授業を駆使して対応する。日本語教師養成科と日本語通訳ビジネス科の学生は、海外にいる学生が少数派であるが、できる限り入国を待って、本校の学生として迎えることができるよう最善を尽くす。

・国内にいる在校生と国外にいる学生のどちらにも質の伴う教育が施せるよう教職員一丸となって取り組む。

・オンライン授業と対面授業を適切に組み合わせて、教育効果の低下を最低限にするよう努力する。

・日本語教育振興協会の教育活動評価の結果に従い、改善に努める。

［取組の結果と点検・評価］

・学校の教務部が立案し、学園本部が承認した事業計画に沿って適切に運営されている。

・三科とも、担当教員が頻繁に会議を行い、情報共有を行った。各科の学習指導状況や問題点を月に２回の運営会議で教務部と共有し、問題の対処法を検討し、改善に努めた。

・賃金などの待遇については学園本部と労働組合との交渉結果に従い適切に対応している。

・学園に新たに業務改革支援室が設置され、新たな決裁方法や決済システムの導入などについて検討を開始した。

・学園の監査室の指導をもとに学校運営を行っている。

・新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を行い、最小限の感染者で学校運営をすることができた。「東京都モニタリング検査【ＰＣＲ検査】」も活用し、感染の拡大を未然に防ぐことができた。

・関連省庁の指導にしたがい、新規入国者の受入れを行ったが、入国制限が長引き、年度内（2021 年度卒業式まで）の新規入国の留学生は１名にとどまった。

・1 年間海外でオンライン授業を受け続づけた学生が日本語科に 20 名、日本語教師養成科に 2 名いた。１年間学習を継続できたのは何よりも本人の努力のおかげであるが、教師も教育レベルや学習意欲の維持のために様々な工夫を行った。

・三科とも、各科の指導内容に応じてオンライン授業と対面授業を組み合わせ、感染防止対策と学習効果を両立するべく尽力した。

・日本語教育振興協会の教育活動評価と学園の監事の指導に基づき、学則を改訂した。
［次年度への課題］
・来年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を徹底したうえで、安全に教育活動を行う。
・関連省庁の指導にしたがって、入学希望者の安全かつスムーズな入国を目指す。
・日本語科と日本語教師養成科については、入国時期が遅れる学生に対しても、自国でオンライン授業を実施して学習機会を十分に確保する。日本語通訳ビジネス科については、入国待ちの学生に対するオンライン授業は授業の特徴から限界があるが、可能な限り入国を待ち、遅れて入国した学生に対しては入国後に補講などを行い学習を支援する。
・オンライン授業と対面授業を適切に組み合わせ、対面授業に引けを取らない教育の質を維持する。

3　教職員		評価
１３	3-1　教育理念・目標が教職員間で共有されているか	5
１４	3-2　教育の質を向上させるための取り組みが確立されているか	4
１５	3-3　教職員評価を行っているか	4

≪現状・具体的な取り組み／課題≫
＜教育理念・目標が教職員間で共有されているか＞
［本年度の課題］
・各科とも、文化学園の 100 周年に向けて教育理念に沿った具体的な取り組みを考え、実行し始める必要がある。
・年度末に行ったオンライン授業の改善のための研修会を踏まえ、オンライン授業と対面授業を組み合わせた運営の中でも、教職員が教育理念や目標を理解して実践できるよう、工夫する必要がある。
［取組の結果と点検・評価］
・文化学園の１００周年事業に関して本校が担当する事業が見直され、他校の事業の支援を実施することとなった。
・各科が掲げる教育目標について、年度末反省報告会による実践の振り返りをもとに修正し、コース開始時に教員間でそれらを共有し、実践した。
［次年度への課題］
・年度末の全体反省報告会で１年間の教育活動を振り返り、見えてきた教育上の課題の改善を目指す。

＜教育の質を向上させるための取り組みが確立されているか＞
〔日本語科〕
［本年度の課題］
引き続き専任教員と非常勤教員の情報や技術の共有を進め、授業運営を円滑化し、学生がより良い教育を受けることができるように努めていく。とりわけ今年度実施した様々な試みの成果をよりわかりやすい形で整えること、オンライン授業のためのツールのマニュアルを整備し、それを教員間できちんと共有すること、学生が様々なアプリケーションやツールを使いこなせるように指導できる教材類を整備することなどが課題となる。
［取組の結果と点検・評価］

オンライン授業に必要な、zoom, Google-workplace その他に関するマニュアルを整備し、授業やテストを円滑に実施できるように整えた。また、オンライン上に教員の情報交換の場を設け、情報共有を進めた。

日本語科の「日本語教育のための効果的な遠隔授業モデル構築プロジェクト」が文部科学省の「専修学校遠隔教育導入モデル構築プロジェクト　専修学校における先端技術利活用実証研究」に採択され、よりよい遠隔授業の実践のために研究を進めている。

昨年度、コロナ禍のために中止していた、教員の「研究活動報告」も再開し、今年度は文書による活動報告だけでなく、オンラインの研修会や研究発表を実施した。

［次年度への課題］

学生がアプリ、ツールを使うための教材はレベルに応じたものをさらに整備する必要がある。

オンラインのツールの普及によって教員は研修会などへも以前より参加しやすくなっている。各教員が得た情報や学んだことを本校の教育に生かせるように、情報共有の場や、アイデアや意見を出しやすく、実践しやすい環境を作っていく必要がある。

また、二年目となる文部科学省のプロジェクトの円滑な進行を学科全体で支援していく。

〔日本語教師養成科〕

［本年度の課題］

今年度行った様々な取り組みを整理し、さらに有効活用できるように整える。授業の引き継ぎが教員の負担になりすぎないように、効率的に行う方法を模索する。

［取組の結果と点検・評価］

昨年度の経験から、リモートワークでも教員間の認識を統一したり綿密に連絡が取れるよう、教材のデジタル化やチャット機能を活用した。しかし、ほとんど出勤しない非常勤講師に十分には情報などを伝えることができなかった。また、通常業務に加えて全ての教材をデジタル化対応するなどの業務が増えることで、担当教員の負担が増すことがあった。

［次年度への課題］

今年度、ある程度教材をデジタル化することはできたが、より効率的に運営できるよう教材などを整備する必要がある。また、非常勤講師の割合が増えることで、教員の連携不足が懸念される。非常勤講師もチャットを活用する、出勤した際には対面で十分に情報伝達をするなどの対応が必要である。

〔日本語通訳ビジネス科〕

［本年度の課題］

昨年度は急遽コロナ禍に対応したため、特にオンライン授業時に使用する教材や資料の作成には手間がかかり、時間にも追われた。本年度は今年度の経験や教訓を踏まえ、特殊な状況にも対応できるようカリキュラムや教材・資料を前広に準備し、教育の質が低下しないよう留意すべきだと考える。

［取組の結果と点検・評価］

非常時における授業運営ということで、「密」を防ぐためのカリキュラム編成に特に注力した。前年度における反省点や新たに教職員同士で共有できた経験なども加え、困難な状況下でも教育の質を下げず、むしろオンライン授業の長所やメリットなどを活かした授業運営を行った。しかし、オンライン・対面の併用授業を円滑に行うため、打ち合わせやメール、チャットなど連絡にも時間を費やすことになり、教員の負担が増えた側面がある。

［次年度への課題］

新たに嘱託教員を迎えることが決定しているため、古参の教員との意思疎通や情報共有などに配慮する必要がある。また常勤教員・非常勤教員間の意思疎通や情報共有にも引き続き最大限の注意を払っていくことが求められる。教材や IT 機器などの教育機材についても適宜点検と見直しを行い、教育の質を高めるための取り組みを継続させなければならない。

＜教職員評価を行っているか＞

［本年度の課題］

・一般事務職員の面談を改善にどう役立てていくか工夫する必要がある。

・学園全体での取り組みと連動させて、教員評価の仕組みづくりを進めていく必要がある。

［取組の結果と点検・評価］

・学園の策定した人事考課制度にしたがって適切に考課を行った。教員については勤怠管理精度を一部変更した。来年度はそれをもとに、本格的に新しい勤怠管理を開始する。

・一般事務職員に対する人事考課精度の一環で行う面談において、評価内容をわかりやすく伝えられるよう、管理職が事前に打ち合わせを重ねて実施した。

・教員の評価制度の策定に向けて、教員の業務内容の見直しを開始した。

［次年度への課題］

・一般事務職員の面談を通して、課題とその改善案を各員と共有する方法の確立を目指し、試行錯誤を繰り返す必要がある。

・教員の勤怠管理が来年度から新しくなる。それに伴い、教員の業務内容の見直しも行うため、全教員と十分にそれらについて共有する必要がある。

4　教育活動		評価
１６	4-1　カリキュラムは体系的に編成されているか	5
１７	4-2　授業評価の実施・評価体制はあるか	4
１８	4-3　目標に向け授業を行うことができる要件・資質を備えた教員を確保しているか	5
１９	4-4　成績評価は適切に行われているか	4
２０	4-5　各種日本語試験の認定率向上のための指導体制は整っているか	5

≪現状・具体的な取り組み／課題≫

＜カリキュラムは体系的に編成されているか＞

〔日本語科〕

［本年度の課題］

引き続き、オンライン授業、対面授業の利点を生かした授業を各レベルで試みていく。また、レベルによって異なる問題点をどのように解決できるかを検討し、カリキュラムに反映させていく。４技能や表記についても、オンラインで指導できること、対面授業で指導できることをしっかり整理し、状況によって変化する授業形態に対応できるような柔軟な体制を保ちつつ、体系的なカリキュラム整備を心がける。

［取組の結果と点検・評価］

本年度は、教員が体験的にオンライン授業、対面授業の利点と欠点を理解してきたため、それぞれに

どのような授業を入れていくか、効果的なカリキュラム、スケジュールを考えて運営できた。しかしながら、新型コロナウイルスの感染状況の悪化により対面授業の日数を減らさざるを得ない状況も度々起こったため、予定していた対面での活動をオンラインに切り替えなくてはいけなくなったり、中止せざるを得なくなったりした。その場合はオンラインでも教育効果の落ちない活動に切り替えるなどの対応を行ったり、授業内容を変更したりするなどの対応を行った。

［次年度への課題］

オンライン授業の導入だけでなく、CEFR、JF スタンダードなどの普及により日本語教育の考え方や指導の仕方に新しい観点が生まれている。それをどのように実際のカリキュラム、教育内容に反映させていくかを検討していく必要がある。

〔日本語教師養成科〕

［本年度の課題］

第 1 回実習をどのような形、時期に行うかで、教育学全体の流れが決まるため、本年度も柔軟な対応を考える。第 1 回の実習は本校日本語科の当該レベルの学生をモデル学生としているため、日本語科の学生の入国状況、学習状況などをみながらの対応となる。「日本語演習」の技能的な目標を考え直し、目標に沿った指導ができるよう体系的に見直していく。

［取組の結果と点検・評価］

昨年度の経験を活かし、今年度は大きく教育学のカリキュラムを変更することなく、スムーズに講義と教育実習を連携しながら実施することができた。「日本語演習」も技能目標を考え直し、教材や評価を変更することができた。

［次年度への課題］

変更した「日本語演習」の教材や評価方法について点検し、改善していく必要がある。また、日本語教師養成に関わる必修科目においても、文化庁が提示する「日本語教師養成に関する教育」の 16 区分を十分にカバーし十分な教育ができているか検討し、カリキュラム改定に向けて方針を固めていく必要がある。

〔日本語通訳ビジネス科〕

［本年度の課題］

コロナウイルスによる影響は本年度にもしばらく及ぶと予想されるため、これを見据えたカリキュラム運営が必要となる。日本人とは違って、言語や生活環境（ICT 環境も含め）に制約のある留学生には遠隔授業は負担が大きい。彼らが目標としている日本語能力習得やスキルをしっかり学べるようにきめ細やかなサポートをしていくと共に、カリキュラム自体もポストコロナ社会の変化にしっかり対応できるように実践的内容を盛り込んでいきたい。

［取組の結果と点検・評価］

昨年度の経験を活かし感染状況に柔軟に対応したことで、予定していた本年度のカリキュラムが運営できた。デジタルネイティブである留学生だけにオンライン授業と課題提出やバーチャル通訳実習など、従来の授業とは異なる学習環境にも適応してくれたので、教師側も安心して教育目標を下げずに授業ができた。

［次年度への課題］

引き続き、対面授業とオンライン授業を組み合わせて実施するので、1 年次と 2 年次の学習目標を科

目担当教員間で共有し、齟齬がないよう綿密な意思疎通を図っていく。外部要因による授業変更も予測しながら柔軟な体制で対応する。遠隔授業で得た経験を今後にも生かすために内容を精査しながらカリキュラムに適宜盛り込んでいく。

＜授業評価の実施・評価体制はあるか＞

〔日本語科〕

［本年度の課題］

2020 年度のコース評価で明らかになった課題を先延ばしにせず、一つ一つの問題が解決できるような体制づくりが必要である。とくに学生同士、学生と教員間のコミュニケーションを円滑にできるように力を尽くす。

［取組の結果と点検・評価］

オンラインと対面を併用した授業実施の二年目となり、課題だったコミュニケーションの円滑化は、いくつかのツールや機会を併用することにより、昨年度よりは改善できたと言える。

今年度も例年同様年度の途中や年度末に学生からの評価を受け、担当教師間で振り返る時を持ち、それが教員にとっての授業評価の役割を果たしている。また、授業期間中も学生からの要望を受け、教師間の授業見学や指導案検討などを行い、授業改善に取り組んだ。海外学生からの授業に対する要望は zoom による面談やメールとなったが、できるだけ実現できるようきめ細かく対応した。

学生の要望をしっかりと聞き、複数の教師が専門的な視点からそれを判断し、教員一人ひとりの授業に反映させることができたと考える。

［次年度への課題］

引き続き、教員一人ひとりが学生の学習状況の把握に努め、自分自身の授業の改善に取り組むとともに、チームティーチングの利点を生かし、授業の相互評価、改善の機会を持つように心がける。

〔日本語教師養成科〕

［本年度の課題］

一人ひとりの学生の声、教員の振り返りを大切にして、取り組んでいく。学生による授業評価は質問項目を見直し、より、効果的な授業評価ができるように努力する。

［取組の結果と点検・評価］

コース評価の時期であるか否かに関わらず、学生の意見や意向をできるだけ聞くようにした。その際に出た意見を可能な範囲で授業に反映させることもできた。しかし、その点について教員同士で振り返り話し合う時間が十分に確保できたとは言い難い。

［次年度への課題］

次年度も学生一人一人の声や気持ちを大切にし、より学びやすい環境を提供できるように努力する。また、教員同士の情報共有や意見交換の機会を確保するよう努力する。

〔日本語通訳ビジネス科〕

［本年度の課題］

遠隔授業が多くなると学生の意見が見えにくくなる部分がある。次年度も学生一人一人の声を大切にしていく。また、教員同士の意見交換、授業見学を活発に行っていく。

［取組の結果と点検・評価］

学生からの授業や教師に対する要望があったため、意見を傾聴し改善案を授業に反映した。
他の教師による授業見学やその後のフォローアップにより、学生の要望を取り入れるように努力した。
本年度は授業だけではなく、実習系の科目や学校行事などの評価や振り返りをその都度行ったため、すぐ学生の反応や意見を知ることができた。ただし、対面で学生に合う時間が少なくなっているので、意見や要望をリアルタイムで吸い上げるのは難しかった。

［次年度への課題］

引き続き、学生一人一人の声を大切にしていく。遠隔授業でも学生とのやり取りを工夫し、学生の気持ちに沿いながら、共通理解を深めていきたい。なお、授業評価や要望を共有し分析・反映していくために、教員間で話し合う機会を増やすとともに円滑なコミュニケーションができるような環境づくりにも努力する。

＜目標に向け授業を行うことができる要件・資質を備えた教員を確保しているか＞

［本年度の課題］

新任教員を適切に研修していくことができるよう万全を期す。

［取組の結果と点検・評価］

日本語科に配属された２名の新任教員に対して、主任を中心に手厚い指導を行った。教務部長と教務課長も新任教員と面談を重ね、成長した点や課題を共有し、それぞれの改善につなげた。
今後の活躍が大いに期待できる人材である。

［次年度への課題］

日本語通訳ビジネス科に非常勤から専任となる教員に対して。十分な指導を行う。
現在、来年度に新たな教員を採用する予定はないが、採用することになった場合は、これまでの経験を生かして面接や実技試験を通して質の高い教員が採用できるよう最善を尽くす。

＜成績評価は適切に行われているか＞

〔日本語科〕

［本年度の課題］

オンラインと対面という二つの形態で指導した結果、到達目標が達成できたかどうか評価できる方法を今後も考えていく。

［取組の結果と点検・評価］

成績評価は国内の学生については従来の定期テストにより行った。海外学生については、今年度全ての成績評価に関わる試験をオンラインで実施することになった。漢字の書きの指導など、国内学生にくらべて不十分な部分が生じるものについては配慮した形式の試験を実施した。

［次年度への課題］

国内、海外ともに指導内容と評価方法、評価の妥当性に整合性があるかどうか、もう一度見直す必要があるだろう。また、来年度以降も定期試験をオンラインで実施しなくてはいけない場合、試験方法・試験内容については継続してよりよいあり方を模索する必要がある。

〔日本語教師養成科〕

［本年度の課題］

継続して評価の妥当性について検討していく。

［取組の結果と点検・評価］
少しずつ評価の検討、変更をしている。特に今年度は「日本語演習」の技能目標と教材を変更したため、それに合わせて評価方法も大きく変更をした。しかし、一部の科目では十分に検討する時間を確保することができず、さらに見直しが必要であると考えられる。
［次年度への課題］
「日本語演習」科目の一部の評価方法が適切ではないと思われるため、早急に改善する必要がある。また、日本語教師養成に関わる必修科目間の、授業時間や演習の量と評価のバランスに問題点がある。カリキュラム改定の検討と同時に、適正な評価のバランスを検討する必要がある。

〔日本語通訳ビジネス科〕
［本年度の課題］
遠隔で試験を行う場合や課題の比重が大きい科目は課題の評価基準を具体的に学生に提示しておく必要がある。引き続き、担当教科と責任者で科目の到達目標・評価基準に関して検討する。
［取組の結果と点検・評価］
対面でのフィードバックが難しい科目に関しては課題や試験の評価基準を具体的に学生に提示し、理解を求めた。なお、遠隔授業での課題に関して、ネット上のものやグーグル翻訳などの引用が盗用に繋がるとの認識が低かったので指導する必要があった。
［次年度への課題］
引き続き、成績評価の基準と根拠を学生に具体的に説明していく。なお、近年増えているネット上のものの引用やグーグル翻訳などに関しては学生へのネットリテラシー教育と注意喚起を強化する必要がある。

＜各種日本語試験の認定率向上のための指導体制は整っているか＞
〔日本語科〕
［本年度の課題］
引き続き総合的な日本語力の伸長を図りつつ、それぞれの日本語力に応じたレベルの日本語能力試験の合格を目指す。
［取組の結果と点検・評価］
本年度は例年通りの取り組みとなった。現在は使用するテキストや授業数などを各レベルの事情に応じて決めている。また、自主作成教材の中には古いものもある。学科全体で調整する必要がある。
［次年度への課題］
学科全体で使用するテキストについて検討し、選定する。また、各科目に対する授業時間の配分なども、使用テキストと並行して検討し直す必要がある。

〔日本語教師養成科〕
［本年度の課題］
全養協日本語教師検定試験は、本校のカリキュラムで学んだこと十分に身に着けていれば合格を目指せるが、外国人学生の場合日本語力の差も合格率に大きい影響があるため、引き続き日本語力を伸ばす指導にも注力する。
［取組の結果と点検・評価］

全養協日本語教師検定試験にも対応した教材を日本語学文法の授業に取り入れるなど、「日本語演習」の科目以外でも外国人学生の日本語力を伸ばせるような教材を取り入れた。「日本語演習」においては、教材を変更することにより文章を書く機会を大幅に増やすことができた。

［次年度への課題］

今年度、各技能の通年目標を見直したことにより改善は見られたが、次年度も引き続き今回変更した教材等を見直していく必要がある。特に、効果的に読解力を伸ばすことができる教材、授業になっているかを早急に見直すことが必要である。

〔日本語通訳ビジネス科〕

［本年度の課題］

引き続き、BJT、日本語能力試験、日本語検定試験など対策科目を指導していく。遠隔授業での指導も多くなると予想されるが、認定率向上に向け細心な指導と学生個々人に対するフィードバックを行う。

［取組の結果と点検・評価］

BJT および日本語能力試験など、対策科目での指導により学生一人一人の日本語力は伸びたともいえる。ただし、遠隔授業が多くなっている分、自律した学習態度や個人の日本語力の差により、成長を見せた学生もいる反面、伸び悩んでいる学生もいた。

［次年度への課題］

引き続き遠隔授業を併用していくので、オンライン教材を効果的に活用し学習できるように指導していく。なお、学生間でも勉強に関するノウハウを共有させ、学習意欲を高めていく。教員は対面で、できるだけ学生の学習状況を把握し、適宜フィードバックと指導を行う。

5　学生支援		評価
２１	5-1　進学・就職指導に関する体制は整備され、有効に機能しているか	5
２２	5-2　学生相談に関する体制は整備され、有効に機能しているか	5
２３	5-3　学生の心身の健康管理・事故・怪我サポートを担う体制があり有効に機能しているか	5
２４	5-4　学生寮等、学生の生活環境への支援は行われているか	5
２５	5-5　保護者と適切に連携しているか	4
２６	5-6　卒業生への支援体制はあるか	5

≪現状・具体的な取り組み／課題≫

＜進学・就職指導に関する体制は整備され、有効に機能しているか＞

●進学

［本年度の課題］

昨年度は入国時期が学生によって異なり、入国と出願の時期が重なるなど、例年にはない難しさがあったが、オンラインを積極的に活用するなど、新たな進路指導の方法を取り入れることもできた。次年度は昨年度の事例を生かし、さらに状況にあった進路指導を目指したい。

［取組の結果と点検・評価］

国内学生と海外オンラインの学生が混在した状況は昨年度と同様であったが、今年度は未入国のまま１年間の学習を終える学生がいた点が異なっていた。また、海外の学生向けにオンラインで入試を行

う学校も増え、それぞれ手続きが違っていたため教員間で情報を共有しながら学生への指導を行った。コロナ禍で教員間のコミュニケーションも以前に比べて取りにくい中、連携を取りながら対応できたのではないかと思われる。

［次年度への課題］

コロナ禍で変化した入試の実施状況などを把握し、適切に学生に情報を伝えられるようにする必要がある。また、この２年間の経験を踏まえ、国内、未入国問わず、それぞれの学習者が希望する進路に進めるよう、バックアップしていきたい。

●就職指導

［本年度の課題］

就職活動のオンライン化を踏まえ、就職支援もそれに合わせた支援を検討していく。また、オンライン説明会やメールなどを積極的に利用し、対面のみに頼らない指導をしていく。

また、教職員だけではなく、専門性のある外部ソースを活用した就職支援も引き続き行う。

［取組の結果と点検・評価］

オンライン説明会や採用情報は積極的に学生にメールで流した。学校でオンライン説明や面接に参加する際には学校の機材を貸し出すなどサポートした。しかし、機材使用のための事前予約や教職員への連絡などの体制は改善する必要がある。

本年度は外国人の採用控えが進み苦戦が予想されたが、主体的に粘り強く活動を続けた学生は内定を獲得することができた。結果的に例年と同程度の就職率となった。

［次年度への課題］

ウェブ選考の流れはコロナ後もある程度続くと見られるので、今後もオンライン化した就職活動への支援を模索していく。また、日本特有の就活においては、留学生の年齢が障壁になったり自身のキャリアをアピールできなかったりという問題がある。キャリアをもって渡日する留学生を見据え、中途採用の就活の理解、情報収集等する必要性を感じる。

＜項目「5-2～5-6」＞

［本年度の課題］

・実施できなかった特徴を持った学生への対応の勉強会をぜひ開催したい。
・引き続き、医務室、学生相談室、寮、海外事務所、業務提携をしている海外の業者と適切な連携をとって学生の学習がより進むよう努力したい。

［取組の結果と点検・評価］

・学生からの相談は担任か学生課が窓口となり、その内容に応じて、適切に対応している。
・健康面については、学生課が窓口となり、学園の医務室と学生生活支援室とも連携して、適切に対応いている。
・学生会館に関しては、学生課が窓口となり、寮長・寮母、学生会館を管理している学園の施設部と連携して問題に対応している。
・保護者とは、学園の海外事務所が窓口となり、学生課と連携して適切に対応している。
・卒業後、就職活動のための特定活動ビザを取得した７名については、就職指導委員会の担当者が窓口となり、毎月の指導を重ね、６名が就職、１名が帰国という結果だった。
・学園の学生生活支援室の菊住彰室長による研修会「合理的配慮を考える」を実施した。

［次年度への課題］

・新任の寮長・寮母と一層コミュニケーションを深め、本校の特徴を理解していただき、学生の支援につなげたい。

・メンタルヘルスの観点からも学生をどう指導すべきか教師と事務スタッフ、学生生活支援室が連携して、より良い指導方法を模索する。

6　在留管理と生活指導		評価
２７	6-1　入国・在留関係の管理・指導と支援が適切に行われているか	5
２８	6-2　日本社会を理解するための支援が適切に行われているか	4
２９	6-3　我が国の法令を遵守させる指導を行っているか	5
３０	6-4　常に最新の学生情報を把握しているか	5

≪現状・具体的な取り組み／課題≫

［本年度の課題］

・今後もしばらくは新型コロナウイルス感染症対策の下で、平常時とは異なる入国・在留関係の管理・指導と支援が求められる。感染症対策は各国の状況によって差異があるため、日本でのルールを入国前に理解してもらい、問題があればすぐに対応できる支援体制をとっていく。

・コロナ禍の状況で常に最新の学生情報を把握することは、平常時に比べて難しい場合もあるが、オンラインを利用したきめ細かいやり取りや登校日を利用した面談の充実を進めていく。

［取組の結果と点検・評価］

・在留管理と生活指導について、確認書を用いた入国前の指導に加え、新型コロナウイルス関連の水際対策に係わる事項について、必要な情報や守るべきことを理解できているかを約束書で確認できる体制をとった。今年度は私費外国人留学生の新規入国はほとんど無かったが、海外事務所や海外受付窓口の協力のもと学生自身が様々なルールを理解し遂行できる体制を整えることができた。

・ZOOM 等によりオンラインによる生活相談等を行うことはできたが、登校日が少ないため、対面による面談は時間的制限があり十分とはいえなかった。

［次年度への課題］

・日本社会を理解するための支援、我が国の法令を遵守させる指導について、コロナ禍の入国指導が優先される傾向があったが、原点に立ち返り再度、海外事務所や海外受付窓口の協力を得ながら注力していく。

・新型コロナウイルスとの共存、共生の生活は今後も続くことが予想されるが、在留管理については、問題の早期発見、早期対応に努めていく。

7　学生の募集と受け入れ		評価
３１	7-1　学生の受入方針は定められているか	5
３２	7-2　学生募集活動は、適正に行われているか	5
３３	7-3　学生募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか	5
３４	7-4　入学選考は、適正かつ公平な基準に基づき行われているか	5
３５	7-5　適正な定員設定及び在籍者数になっているか	5

≪現状・具体的な取り組み／課題≫

［本年度の課題］

・日本語教師養成科について、日本人の募集について考察する。

・日本語教師養成科と日本語通訳ビジネス科の国内募集については、例年並みであったが、来年度は受験生が減少することも考えられる。2021 年度は、日本語学校の先生との情報交換の機会を増やして、募集を強化していきたい。

・コロナ禍が続く場合、厳しい状況にはなるであろうが、関西地区での募集活動の機会を作っていきたい。

・新規渡日で日本語科へ入学を希望する学生の日本語力については、客観的に日本語力を確認できない場合の日本語力テストの実施等、積極的に行っていく。

・募集活動で海外に行くことができない中、海外事務所の協力が更に重要になる。現地とのコミュニケーションを密にして、有効な募集活動を引き続き実行していく。

［取組の結果と点検・評価］

・日本語教師養成科の日本人の募集について、学園内他校の日本人を対象とする募集活動は、就職支援室の協力で行うことができたが、結果を出すことはできなかった。

・日本語教師養成科と日本語通訳ビジネス科の国内募集について、直接的な日本語学校の先生との情報交換の機会を増やすことは困難であったが、日本語学校の先生が進路指導に使用する支援サイト等を利用して PR 活動を強化することができた。実際、このサイトを見た先生からの問い合わせもあった。

・日本全体で留学生数が減少の中、関西地区での募集活動は費用対効果が望めないことから行わなかった。

・新規渡日で日本語科へ入学を希望する学生の日本語力については、必要に応じて日本語力テストを実施することができた。

・ほぼ毎日、海外事務所や海外窓口の担当者と連絡をとり、現地とのコミュニケーションを密にすることができた。タイムリーな現地の情報は有益であり、学生支援の助けになった。

［次年度への課題］

・日本語教師養成科について、日本人の募集についての考察は引き続き実施する。

・コロナ禍の中、日本語学校の先生との対面による情報交換は今後も困難なことが多いと思うが、SNS を有効利用した PR を実施していく。

・留学生数を注視しながら、首都圏以外の募集活動について検討していく。

・新年度も募集活動で海外に行けないことが予想されるため、海外事務所の協力は必要不可欠である。更に現地とのコミュニケーションを密にして、有効な募集活動を引き続き実行していく。

8　財務		評価
３６	8-1　中長期的に学校の財務基盤は安定しているといえるか	3
３７	8-2　予算・収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか	5
３８	8-3　財務について会計監査が適正に行われているか	5
３９	8-4　財務情報公開の体制整備はできているか	5

≪現状・具体的な取り組み／課題≫

［本年度の課題］

引き続き人件費等の見直しを進め、さらに人件費率減と、学生納付金の回復を目標とするとともに2020 年度に施行された授業料値上げにより、収支改善を図っていく。

［取組の結果と点検・評価］

2020 年度は新型コロナの影響で大きな収入減となり、学生納付金は１億７００万円の収入減となった。それに対し人件費は２７００万円増加した。2021 年度も引き続き新型コロナの影響で収入減が想定される。ただし文化学園学校部門全体では 10 億円の黒字を維持している。

［次年度への課題］

次年度は人件費など支出の見直しを進め、さらに支出の減少と、入国制限が解除されたことにより学生納付金の回復を目標とするとともに、学校会計の収支改善を図っていく。

9　法令等の遵守		評価
４０	9-1　法令、設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	5
４１	9-2　個人情報に関し、その保護のための対策がとられているか	5
４２	9-3　関係省庁への定期報告を遅延なく実施しているか	5
４３	9-4　自己点検・自己評価の実施と問題点の改善に努めているか	5
４４	9-5　自己点検・自己評価結果を公開しているか	5

≪現状・具体的な取り組み／課題≫

＜項目「9-1～9-3」＞

［本年度の課題］

今後も情報漏えいなどに注意し、増加し複雑化する入国管理局や渋谷区などへの報告も遅延なく行う。

［取組の結果と点検・評価］

今年度は情報漏えいなどの事象はなく、入国管理局や渋谷区などへの報告はコロナ禍の影響はあったが不備なく行った。

［次年度への課題］

今後も情報漏えいなどに注意し、増加し複雑化する入国管理局や渋谷区などへの報告も遅延なく行う。

＜項目「9-4～9-5」＞

［本年度の課題］

・「自己点検・自己評価報告」について、引き続きホームページ上で公開していく。

・2021 年度は「学生生活調査」の年である。新型コロナウイルス感染症の状況をみながら設問について等、検討しながら進めていく。

［取組の結果と点検・評価］

・「自己点検・自己評価報告」について、予定通りホームページ上で公開することができた。

・隔年で実施している「学生生活調査」について、コロナ禍で不要となった設問を削除して、12 月に実施、1 月に結果を集計することができた。

［次年度への課題］

・「自己点検・自己評価報告」について、引き続きホームページ上で公開していく。

・次年度は、簡易的な自由記述のアンケートを実施して、学生の要望などを確認する。

１０	社会貢献	評価
４５	10-1　学校の教育資源や施設を活用した社会貢献を行っているか	5
４６	10-2　学生のボランティア活動を奨励・支援しているか	4

≪現状・具体的な取り組み／課題≫

＜項目「10-1」＞

［本年度の課題］

今後も渋谷区在住外国人との日本語教室及び国際交流事業は続けていく。

外国語保持教室は今後団体の依頼があれば対応する。

［取組の結果と点検・評価］

外国語保持教室はコロナ禍でオンライン開催になり、外語の教室は使用しなかった。

渋谷区日本語教室は４月から年１４４回開講し、渋谷区在住の外国人の日本語教育に貢献した。

渋谷区国際交流事業はコロナ禍で１回中止になったが、年３回俳句や江戸風鈴絵付けなどを行い、日本文化の紹介や外国人との交流を深めることができた。

［次年度への課題］

今後も渋谷区在住外国人との日本語教室及び国際交流事業は続けていく。

外国語保持教室はコロナ禍により 2022 年度も教室使用は無い予定である。

＜項目「10-2」＞

［本年度の課題］

・学園内の他の学校の学生と交流ができる学生会館という場を利用して、地域社会とも学生が関わっていける取り組みを考える。

・学内だけではない日本人との交流やボランティア活動については、学生に情報を提供する等、引き続き積極的な支援をしていく。

［取組の結果と点検・評価］

・コロナ禍で、学生会館の中でも行動制限があるため、学生会館を利用した地域社会との交流は困難であったが、渋谷区国際交流事業に積極的に参加する学生もおり、学校以外のコミュニティーの機会を学生に与えることができた。

・東京都事業である中高生の英会話学習相手ボランティアについて、年数回にわたり学生の有志が参加した。新型コロナウイルス感染症の状況に応じてオンラインと対面の開催であったが、参加した学生にとっては学校ではできない貴重な体験を得ることができた。

［次年度への課題］

・日本人との交流やボランティア活動については、有益な情報を学生に引き続き提供していく。また、コロナ禍前に実施していた中学校との交流体験が復活した折には、積極的な支援を行っていく。

総　括

本年度の終わりに世界を震撼させる戦争が起きた。ロシアによるウクライナへの侵攻が私たちの心に無力感を覚えさせるのは、武力によって人を支配しようとしているからである。現代にあって真に問題を解決する力は武力ではなく、話し合う言葉の力でなければならない。私たちが留学生に言葉の教育を行っているのは、日本語を通じて世界中にコミュニケーションの力が広がって欲しいと願うからである。

今年もコロナ禍にあって日本に入国できず一年を通してオンライン授業を受け続けた学生がいた。学校に来られても対面とオンラインの組み合わせで授業が進められた。このことがかえって教職員の意識を高め、オンライン授業用の「予習動画」の制作などにも取り組んできた。
将来が見えない不安からメンタル面でトラブルを抱える留学生には、学園全体を見る学生生活支援室の力を借りて、誰ひとりとりこぼさない教育環境を作ることに力を注いできた。
混沌とした時代だからこそ、言葉の力はより一層求められていく。苦境に立っても学生によりそった教育を実践していることで、自己点検・自己評価には自信を持っているが、今後も学生の声を拾い上げながら進んでいきたい。